

# 『和泉式部日記』における「女」について

林 部 さち江

## I

『和泉式部日記』に関する研究は、他の著名な作品に比べると、あまり盛んには行なわれていず、研究書も少ない。そのためかは、わからないが、まだまだ解明されていない事柄が沢山ある。その中の最大のものとも言える問題は、この『和泉式部日記』が、自作であるのか、他作であるのかということである。このことは、以前から、多くの学者によって論争されてきたものではあるが、まだその結論には至っていないのである。

私は、この事実を知って非常に驚いた。なぜなら、私の頭の中ではすでに何年も前から、『和泉式部日記』の作者はイコール和泉式部であるという方程式が出来上がってしまったいたにもかかわらず、研究を進めるにあたって根本からそれが、覆えされてしまったためである。そこで私は、力が及ぶかどうかかわからないが、せつかくこの作品を研究することにしたのだから、ある一点からでも良いから、最終的には、作者論へと結びつけ

たいと思った。

この作品には、もう一つ大きな問題がある。それは、これが「日記」であるのか「物語」であるのかということであり、その根拠は、書名<sup>注①</sup>とか、『全講和泉式部日記』の中の鈴木一雄氏の弁を借りると、この叙述の特色が、「①日記であつたら、作者の目のとどく範囲を越えないはずなのに、主人公の見聞の外まで経験性をもって書かれている。つまり、主人公と作者を同一人物とみるとしたら、その視点に混乱があると考えることも可能であること。②日記であつたら、自記的第一人称的叙述をとるのがふつうなのに、主人公を第三人称的にあつかい、しかもそれが徹底してもいないこと」となっていることなどである。そしてこれは同時に、自作か他作かの問題の根拠にもなっているのである。②について、もっとわかりやすく言うと、この『和泉式部日記』の中の主人公は、「女」ということばで表わされているということなのである。

私は、この「女」という文字によってあることを思い出した。

それは、古代国文学の講義で、『源氏物語』を扱っている時、桐壺の巻で、桐壺の更衣のことを、「女」と表してあり、その注に、「更衣をさす。この物語で登場人物を「女」と呼ぶ場合は、恋の場面で歌が詠まれることが多い」とされて<sup>注2)</sup>おり、これは、「女」の特別な使い方で、この「女」は普通の三人称の「女」として用いられているのではないということである。私はこのことを第四章でのこの論文の本論のカギとして使おうと思う。そして、そこから作者がはたして誰なのか、私なりの考えを示したい。

## II

『和泉式部日記』には、和泉式部の自作という説と他作という説があることは、第一章で、軽く触れた。ここでは過去の各学者の各々の作者に関する研究を、大橋秀清氏の『和泉式部日記の研究』をもとに紹介しておきたい。

与謝野晶子氏は、『新訳和泉式部日記』において「和泉式部日記は和泉式部が自家の閲歴の重要な一部を、わざと三人称で客観的に描写した短篇小説です。」と自作説を取っている。

次に池田亀鑑氏は、三人称で書かれたことを疑問としているが、日記に引用された歌が式部のものらしいこと、自叙伝的で後人が書いたものとは思えないことを理由に、自作であると説いている（『宮廷女流日記文学』）。しかし、同氏は、昭和九年の日本文学講座『日記文学と紀行文学』では、「他選の歌集から

出発したらしいと思はれる日記文学は物語の性質を濃厚にして来る。」とし、その例として『和泉式部日記』も挙げていて、さらに「これ等の実録的物語は、多く第三人称をもって、第三者によつて書かれている。」としている。また、昭和二十六年の日本文学教養講座の『物語文学』でも「歌の詞書や日記は第一人称で語られるが、物語は第三人称で語られる例である。この意味で和泉式部日記は歌の作者すなはち日記の当事者としての女主人公の自記とは認めえない」とあり、他作説に乗り変えている。

鈴木一雄氏の『全講和泉式部日記』によるとはじめて周到な『和泉式部日記』他作説を立てたのは、今井卓爾氏（『平安朝日記の研究』）であるという。その主な内容は、「主人公の目を通して記されるはずのところ<sup>1)</sup>が、見聞のそとにまではみ出している。つまり主人公即作者とすれば観点に混乱がみられる。」「主人公であるべき和泉式部が第三人称で書かれている」「作品の筋が単純で歌の羅列に終始しており、兩人以外のことには筆がのびていない。したがって、材料は『和泉式部集』などであらう」などであり、これらを理由として、和泉式部を主人公とし、物語作者の態度で書かれた創作であると、説いている。

吉沢義則氏は、「第三人称で書かれてゐる為、和泉式部物語と呼ばれ、作者に就いても疑はれるのではあるが、色々の点から和泉式部の著作と見なければなるまい」（『平安朝の女流日記文学』）としている。

岡一男氏は、「作者は自己を三人称に書きながら、いつしか客観的態度を忘れ、主観的表白をしている。これは此の『日記』の小説的手法上の欠陥と言へるが、一方では此の書の作者が、歌人たる和泉式部であることをば証拠だててゐて、先に述べた、此の『日記』の成立を後人の手になるといふ小説に対する反駁となる。もし他人が『和泉式部日記』を書くならば、もっと客観的な記述をしたであらうし、また式部の家庭の事情をハッキリ写したであらうと思われる」と『日本文学講座』の「和泉式部日記の研究」の中で説いている。

また、清水文雄氏は、『和泉式部日記』を書こうとした動機を、「式部が最も熱烈な愛情をささげた帥宮の映像を永遠なものに造型しようとした」と、三条西本の校訂の改版の解説で説き、式部の自作説を取っている。そして、西下経一氏は、「式部は自らを『女』とかき、又自らの文の文句を記した後に『とあり』と記してゐるが、猶、宮の御方に起った出来事をも数々記してゐるが、推量を用ゐないで三人称を用ひ、客観的事実として記してゐる。それでは物語としての形態を備えてゐるかといへば、事件の変化、人物の個性心理の変化、家庭生活、社会事件、思想趣味など、物語として必要なものの描写は、極めてほのかで鮮明でなく、そこに深く感じられるものはやはり気分過ぎない。のみならず、四月十日、四月晦日、五月六日、七月七日、七月晦日、八月晦日、九月十余日、九月晦日、十月十余日、十一月朔日、十二月十八日と日附を掲げ、自己の身邊

を綿々と書き記してゐる点から見れば猶日記とすべきである」(『日本文学大系』『岩波講座日本文学』——「平安朝の日記紀行」)としている。

鈴木知太郎氏は、前に記した今井卓爾氏と同じ超越的視点や第三人称的叙述を解析しながら、まったく反対の立場をとつて、

一、第三者が始めから客観的な立場に立ち、式部と宮とを対象として、この日記を書いたものであれば、それら作中の人物とはあくまでも一定の距離を保ちつつ、比較的冷静にその叙述を進め得るであらうから、今井氏のお説のような著作態度の紛乱というか、主客の混淆というか、ともかく、そうした不統一や矛盾は、むしろ起きる機会が甚だ少なくしてすんだものではなからうかと思う。これは作者が式部自身であつたために、意識的に持っていたところの、自己を第三人称化して客観的立場をとるといふ当初からの著作態度を、終始徹底的に保ち続けることを得ずして、時に主観的な、直接的な描写法をとらざるを得なかつたという矛盾によつて、かえつて、おのずからそこに生じた現象と解するわけにはいかないであらうか。而してかような描写態度の矛盾と不統一とは、事実、式部の感情が高潮し、精神的緊迫感が濃厚だと思われる部分において、より多く見受けられるのである。

二、前記のごとき第一人称的な描写と第三人称的な描写とが混淆乃至は渾融した相で見られる所は、式部自身に関する叙述

の部分だけに限られていて、帥宮に関する部分にあっては、殆どそうした傾向が見受けられない事実である。すなわち作者としての式部にあつては、宮に関する叙述や描写を行うときは、自己の場合とは異つて、比較的冷静に、終始一貫、いわゆる第三者的立場において筆を進めることが、出来るのであるから、表現の面に、混乱や矛盾などの生じる氣遣いは、先ずないと言つて良い。しかし式部自身が自分のことを書くとなると、それが魂の最も熾烈に燃えた、記念すべき期間のことであり、資料となつたものは特に思い出の多い宮との贈答歌や消息の類であつてみれば、常に自己を客観化し、それに対して終始、第三者的立場を堅持しつつけるということは殆ど至難な業であつて、ともすれば、そこに混乱と分裂との起きがちなことは、むしろ自然の勢いと言ふべきであらう。したがつて、そうした描写態度に矛盾の見られるという事実こそ、かえつて作者式部説の成立する余地が見出せそうに思われる。そして自作または、自選の作品に第三人称的表記法をとることは、時代の風潮でもあり、また式部の好んで用いた手法であつたとも、解せられないことはない。したがつて式部日記における第三人称的表現ということは、ただそれだけでは必ずしも作者の第三者なることを想定する有力な根拠とはなし難い。

などの他に、反省的心情・自然的心境もまた式部の側だけに示され、「かなし」「みだる」などのような、作中に在る人物の

心情表現に関する情操語も、ほとんど式部の側に用いられていることなどを挙げ、自作説をとっている(古典文庫『和泉式部日記』解説)。

この後に、川瀬一馬氏の「和泉式部日記は藤原俊成の作」という突飛な他作説も出たが、現在のところ、どちらかという、自作説の方が、優位であるとみられている。

### III

さて、いよいよ本題に入るわけであるが、前章において、『和泉式部日記』の作者をめぐる論争で、「女」という表現が、いかに大きな影響をおよぼしているかが、理解されたと思う。この「女」という表現が使われていたために、作者に関する疑問が生じてきたと言つても良いくらいであらう。

この「女」という表現は、この作品の中に十六例出てくるが、それを全て挙げてみると次のようになる。

①「<sup>注(3)</sup>かくなむ」と言はせたまへれば、女いとびなきここちすれど(P 88)

②晦日の日、女、〈歌〉と聞こえさせたれど、(P 92)

③女は、ものへ参らむとて精進したるうちに、(P 92)

④宮、例の忍びておはしまいたり、女、さしもやほと思ふうちに、(P 94)

⑤雨うち降りていとつれづれなる日ごろ、女は雲間なきがめに、(P 95)

⑥女、道すがら、あやしの歩きや、人のいかに思はむ、と思ふ、(P 99)

⑦女は、また端に月をながめてゐたるほどに、人の入り来れば、(P 103)

⑧女、もの聞こえむにもほど遠くてびんなければ、扇さし出でて取りつ、(P 104)

⑨「いとおぼつかなくなりけるを、などかときどきは。人かすにおぼさぬなめり」とあれば、女、(P 107)

⑩おはしまして、門をたたかせたまふに、女、目をさまして、(P 113)

⑪女は寝て、やがて明かしつ(P 114)

⑫女、ながめ出だしてゐたるにもて来たれば、(P 116)

⑬あはれにおぼされて、女寝たるやうにて思ひ乱れて臥したるを、(P 119)

⑭「童参りたりや」と問はせたまふほどに、女も霜のいと白きにおどろかされてや、(P 123)

⑮かくて、女かぜにや、おどろおどろしうはあらねどなやめば、(P 139)

⑯女はそののち、もののみあはれにおぼえ、難きのみせらる。(P 143)

以上のように、「女」という表現は、全部主語としてしか用いられていない。

織田裕子氏が、この「女」の特徴について『和泉式部日記』

の作者について」の中で詳細に述べていられるので、その所説を要約してみると、

○「女」十六例中十一例は、文の最初に出る。

○十六例中十例までは「女」の直後に女の独白や一人称的描写がつづいて、第三者的観点が貫ぬかれているとは思えない。

などが挙げられている。

さて、この「女」なる表現は、ほとんどの学者によって、単に三人称の代名詞であると認識されてきた。しかしながら『和泉式部日記』の「女」は果たして第三人称の単語であろうか。しばらく『日記』から離れて検討してみたい。

#### IV

一人称や二人称には、その語自体、尊敬や謙譲の意味を含む場合が多いが、三人称には、その意を持ち合わせるものは、原則的にはないと言っても良いであろう。女という表現に尊敬の意が加わってくるならば「女君」が的確であろう。しかし、当然「女君」であるべき所が「女」となっている例は、和泉式部と同時代を生きた清少納言や紫式部の作品、『枕草子』『源氏物語』の中にも見ることができ。

『枕草子』では、『新潮日本古典集成』(一)のP 22に、

○女はた、知らず顔にて、おほどかにて居たまへり。

とあり、文末の「たまへ」を見れば、一目瞭然であるが、敬語

表現で文を結んでいるにもかかわらず、主語はあくまでも「女」であって、「女君」ではない。このことから、この「女」が、普通の三人称でないことが理解できるはずである。

そしてさらに、阿部秋生氏の「枕草子評訳」においてこの「女」は、「婿の通っている姫君のこと。男（愛情関係ある男性）に對することば」と説明されており、このことが裏付けられている。

次に『源氏物語』であるが、こちらでは、『枕草子』より多くその例をあげることができる。すでに第一章において軽く触れてあるが、『新潮日本古典集成』の『源氏物語(一)』P 16 9 に、

女もいといみじと見たてまつりて、

とあり、「女」の注には、「更衣をさす。この物語で登場人物を「女」と呼ぶ場合は、恋の場面で、歌が詠まれることが多い」と書かれている（石田讓二氏、清水好子氏校注）。

これも、先に挙げた『枕草子』の例に違わず、「女」は桐壺の更衣であり身分の高い女性であることは明らかである。また賢木の巻にも、

①女は、「さしも見えじ」と、思しつゝ、むめれど、え忍び給はぬ御氣色を、いよ／＼心ぐるしう、猶、おぼしとゞまるべきさまにぞ、きこえ給ふめる。（P 371<sup>注(4)</sup> 3）

②女も、え心づよからず、名残、あはれにて、ながめ給ふ。

（P 372 3）

③女の御さまも、げにぞ、めでたき御さかりなる。（P 382 1）

3）

と、同様の例を挙げることができる。①②の「女」は、六条御息所であり、③は、右大臣の娘、朧月夜内侍である。どちらも高貴な方で、それは、文末に見られる敬語表現などによっても明らかである。これらの「女」も敬語表現を超越して使われているのである。

「女」に對する「男」の語が、これまで記してきたような使われ方をしている例も、『源氏物語』の中に、見ることができる。

『新潮日本古典集成』『源氏物語(一)』の、末摘花の巻P 260 6に、

①男は、いと尽きせぬ御さまを……

とあり、また『源氏物語(二)』の賢木の巻P 384 2とP 386 4に

②をとこは、「うし、つらし」と、思ひ聞え給ふこと、限りなきに、来し方行先、かきはてにけれど、いで給はずなりぬ。

③男も、こゝら、世をもてしづめ給ふ御心、みな乱れて、うつしざまにもあらず、よろづの事を、泣く／＼うらみ聞え給へど、

のように見ることが出来る。これらの「男」（または、「をとこ」）の全ては、源氏の君である。そして①の頭注には、「源氏は、男女對座の場面ではしばしばこう呼ぶ」と記され、小学

館「日本古典文学全集」源氏物語(一)の同じ部分の注にも、「男女の恋愛関係の高潮する場面では「男」「女」とのみ呼ぶことが多い」(阿部秋生氏・秋山虔氏、今井源衛氏)と書かれている。これらもまた、敬語表現を超越したものであることが、理解できよう。

残念なことに、『和泉式部日記』に登場する「女」は、当然和泉式部であるので、今まで例として挙げてきた「女」とは違って身分が低い。であるから、文章上に「女」に対する敬語表現は見られない。しかしながら、同時代の作品に、しばしば、普通の三人称らしからぬ用い方が見つけられることや、それらが皆、男と女がいてそこに恋愛感情がある場合に使われていること、また恋の歌を詠む時に多く使われることを考慮にいれると、『和泉式部日記』の「女」も、本来敬語表現を超越した特殊なものであることが、推測できる。

鈴木一雄氏の『和泉式部日記』では、このことを、「主人公を「女」と呼ぶが、まったくの第三人称的叙述ではなく、主体を第三者的に突き放したのではなく、主客未分の叙述である」と表現している。主客未分ということは、主でもなく客でもないということではなく、主でもありうるし、客でもありうるということである。『和泉式部日記』の場合は、「主」であつたと考えられる。

つまり、『和泉式部日記』の作者は和泉式部本人なのである。これまでのことを考え合わせ、私はこの結論に達した。「女」

が三人称でなければ、自作説にも大きな道が開かれよう。

#### 〈注〉

- (1)『和泉式部物語』という別名がある。
- (2)新潮日本古典集成『源氏物語』
- (3)日本古典文学全集
- (4)(5)岩波日本古典文学大系